〔六三〕期城大守楊衒之

期城大守楊衒之問達摩大師、西天五印、師承爲祖、其道如何。祖曰、明佛心宗、寸無差誤、行解相應、名之曰祖。又問、此外如何。祖曰、須明他心、知其古今。不厭有無、於法無取、不賢不愚、無迷無悟。若能是解、故稱爲祖。即説偈曰、亦不覩惡而生嫌、亦不觀善而勤措、亦不捨智而近愚、亦不抛迷而就悟、達大道兮過量、通佛心兮出度、不與凡聖同躔、超然名之祖。

傳燈録

＊

期城大守の楊衒之、達摩大師に問う、「西天五印に、師承するを祖と爲すと、其の道如何」。祖曰く、「佛心宗を明らめ、寸も差誤無く、行解相應す、之を名づけて祖と曰う」。又た問う、「此の外は如何」。祖曰く、「須らく他心を明らめ、其の古今を知るべし。有無を厭わず、法に於て取る無く、賢ならず愚ならず、迷無く悟無し。若し能く是のごとく解せば、故より稱して祖と爲す」。即ち偈を説いて曰く、「亦た惡を覩るも嫌を生ぜず、亦た善を觀るも勤措せず、亦た智を捨つるも愚に近づかず、亦た迷を抛うつも悟に就かず、大道に達して量を過ぎ、佛心に通じて度を出づ、凡聖と躔を同じくせず、超然たるを之を祖と名づく」。

傳燈録

＊

期城の長官であった楊衒之は、達磨大師にこうきいた、西のくになるインドでは、五つのくにの何処でも、師より（道を）うけて祖というとか。その道とは、いったい何か。

祖　仏陀の心の根本を明らかにして、（自己の心と）寸分のちがいがない。その実行と見解がぴたりと一致するのを、これが祖師（の道）とよばれる。

（長官は）さらにきいた、その外のことはどうか。

祖　他心通の悟りに達し、古と今を見通さねばならぬ。有と無を、共に嫌悪せず、対象についてまわらず、賢人でもなければ、愚者でもない。（何かに）迷うこともなく、悟ることもない。もしも此処まで判るなら、それをこそ祖とよんでよい。

そこで（次のような）偈を説かれた、

（自分の）悪心を気にして、自己嫌悪におちいらない、
善心をめざして、勤めはげむこともない。
（ことさらに）知恵を捨てて愚者に親しむこともなく、迷いを放棄して悟りを完成することもない。
大道に到り尽して、（細かい）思量の域を越え、仏陀の心にかなって、六度の修行をふみはずす。
凡夫とも聖者とも、足あとが合わず、全く気にならないのを、祖とよぶのである。

*

○期城＝河南省沁陽県西三十里。『読史方輿紀要』巻四九・河南懐慶府河内県邗城の条、「期城は府城の西三十里に

在り。故の隰城なり」。

○楊衒之＝〔一六〕に既に登場した。その注を参照。

○須明他心、知其古今＝「他心」は六神通の一つである他心通のこと、他の人の心を知る力。しかし、古今を知るのは宿命通であり、この二句はうまく噛み合わぬ。『倶舎論』巻二七、「諸有の他心通を修せんと欲する者は、先に審らかに己の身心二相の前後變異して展轉相い隨うを觀じ、後に復た審らかに他の身心相を觀ず。此れに由りて加行して漸次に成ずるを得。成じ已って自心の諸色を觀じ、他心等に於て能く如實に知る」（T二九―一四三a）。「古今」は、嘉靖十年智異山鐵窟開刊本は「今古」に作る。

○於法無取……＝「取」は求め取る、選び取る、執着する、実体としてとらえる等の意。『思益梵天所問経』巻二、「一切法は相を取る無きに、而るに衆生は相を取る有り、如來は此に於て大悲を起したもう」（T一五―四一c）。『馬祖語録』に、「何をか平常心と道う。造作無く、是非無く、取捨無く、凡無く聖無し」（『馬祖の語録』三二頁、禅文化研究所、一九八四年）とあり、馬祖に始まる祖師禅の新しい運動の成果を受ける。

○不覩惡而生嫌……＝「不」は句全体に係るのが普通である。不を「而」より前の句にだけ係けて、後句を肯定的に屈折させて、「……せずして……す」と読むのは、中国仏教に於ける般若思想の実践的理解に基づく誤った読み方である。『維摩経』弟子品の「不斷煩惱而入涅槃」の句を例に出して、柳田聖山『ダルマ』（『人類の知的遺産16』二二五頁、講談社）で次のように説明されている。

この句も、「煩悩を断じて涅槃に入らず」とよむのが正しく、「煩悩を断ぜずして涅槃に入る」とよむのは、文法的には不適であるが、実践的な意味からは、むしろこのほうに特色がみられる。例の矛盾の統一とか、即非の論理とよばれる、中国仏教独自の発想がそれである。……インドの大乗仏教は、煩悩を断じて涅槃に入るという

分別、つまり煩悩を否定し、涅槃を肯定する執着を嫌って、煩悩を断じて涅槃に入るのでないことをくりかえし教える。そこには、煩悩よりも、涅槃へのとらわれを警戒する気分が強い。……ところが、中国民族の仏教は、その出発点より無為不無為の論理をテコに、後半を積極化することにより、実践的なものとして般若思想をうけいれる。……そこには無為を体、無不為を用とする、現実に即した実践の思考が、強く働いている。

しかし、ここではこのような読み方は無理である。『宗鏡録』巻三（T四八―四二八b）、『小室六門』第四門「安心法門」の末尾（T四八―三七〇c）にもこの偈句は引かれる。

○勤措＝目的意識をもってつとめて行為する。

○過量＝思量のらち外にある。『思益梵天所問経』巻一、「世尊よ、若し善男子善女人有りて能く是の如き法義を信解する者は、當に知るべし是の人は諸見を脱し得たることを。……當に知るべし是の人は量有る無く已に量を過ぐことを」（T一五―四〇a）。

○出度＝方便としての六度の行為を超え出る。

○超然＝超出して何ものにもとらわれぬさま。『老子』第二六、「榮觀有りと雖も、燕處して超然たり」。

○典拠について＝『傳燈録』と明記されている。いま東禅寺版『伝灯録』巻三・菩提達磨章の該当箇所をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようになる。

有期城太守楊衒之①、早慕佛乘、問師②曰、西天五印、師承爲祖、其道如何。師③曰、明佛心宗④、行解相應、名之曰祖。又問、此外如何。師②曰、須明他心、知其古今。不厭有無、於法無取、不賢不愚、無迷無悟。若能是解、故稱爲祖。又曰、弟子歸心三寶、亦有年矣。而智慧昏蒙、尚迷眞理。適聽師言、罔知攸措。願師慈悲、開示宗旨。師知懇到、即説偈曰、亦不覩惡而生嫌、亦不觀善而勤措、亦不捨智而近愚、亦不抛迷而就悟、達大道兮過量、通佛心兮出度、不與凡聖同躔、

超然名之曰祖。（禅文化研究所影印本、三四頁上）

大字は共通の文字、小字は『伝灯録』。

①太＝大（宝蔵）　②（達摩大）＋師（宝蔵）　③師＝祖（宝蔵）　④宗＋（寸無差誤）（宝蔵）、高麗本『伝灯録』『宝林伝』『祖堂集』には「寸無差誤」の句有り。

〔六四〕唐韓文公愈

唐韓文公愈、爲潮州刺史時、問大顚和尚、弟子軍州事多、省要處乞師一句。師良久。文公罔措。三平爲侍者、乃敲牀三下。師云、作麼。平云、先以定動、後以智拔。公乃禮謝三平云、和尚門風高峻、弟子於侍者邊得介入處。　傳燈録

＊

唐の韓文公愈、潮州の刺史爲りし時、大顚和尚に問う、「弟子、軍州の事多し、省要の處、師の一句を乞う」。師、良久す。文公、措く罔し。三平、侍者爲りて乃ち牀を敲くこと三下す。師云く、「作麼ぞ」。平云く、「先に定を以て動かし、後に智を以て拔く」。公乃ち三平に禮謝して云く、「和尚の門風高峻なり、弟子、侍者邊に於て介の入處を得たり」。　傳燈録

＊

唐の韓愈（文公）は、潮州守護に任ぜられた時、大顛和尚に次のようにきいた、
弟子（わたくし）は、公務が多忙です、いちばん大切なところを、どうか一言でお示しを。
先生（大顛）は、しばらく黙した。
文公は、手のつけようもない。
三平（義忠）があたかも侍者で、先生の椅子を三つたたいた。
先生　何をする。
三平　先ず禅定に入って、（相手の）心を動かす、そこで始めて知恵を引きだす。
文公は三平に礼謝した、先生（大顛）の家風は高すぎる、弟子は侍者殿の次元で、登り口を見つけました。

＊

○韓文公愈＝七六八―八二四。字は退之、鄧州南陽（河南省南陽県）の人。三歳にして孤児となったが、好学勉励して二十五歳（七九二年）で進士に登第した。柳宗元（七七三―八一九）と共に古文復興運動の先駆をなす人であり、唐代第一の文章家として知られる。元和一四年（八一九）正月、憲宗が鳳翔法門寺の仏骨を宮中に迎えるのに反対した『論仏骨表』を奏上し、却ってその逆鱗に触れて潮州刺史に左遷された。大顛との出遇いはこの時のことである。翌年（八二〇）穆宗が即位し長安に呼び戻された。長慶四年（八二四）一二月没。文公と諡された。『韓昌黎集』四十巻、『外集』十巻がある。『旧唐書』巻六〇、『新唐書』巻一七六。
○大顛和尚＝韓愈との出遇いによって世に知られるようになった禅者。石頭希遷に嗣ぐ。『祖堂集』巻五では、石頭との問答及び韓愈との交渉が録されているが、『伝灯録』巻一四では韓愈との問答は削除されている。仏日契嵩（一

〇〇七―七二）は、韓愈の排仏的論調を盾に取って仏教を排除しようとする宋儒に対して、儒仏一致を説くことで仏教を擁護し、主著である『輔教編』に、韓愈が大顛に法を問うたことを取り挙げ、自注の『夾注輔教編』で、「韓子の内心は佛法に於て亦た其の事を美善とする有り。而して禪家の書、祖堂集の類の如きも亦た、韓は嘗て法を大顛に問えりと云う。此の如きは即ち必ず是なり。祖堂集の妄りに書するに非ず」と論じている。詳しい伝記を伝えぬが、『広東通志』巻三二八は『潮州府志』より大顛の伝を転載し、次のようにいう。「寶通、大顛と號す。俗姓は陳氏、或は曰う楊姓と。先世は潁川（河南省）の人。開元末に生まる。幼くして穎異。大暦中、藥山惟儼と並びて西山に惠照に師事す。既に復た之と同遊して南嶽に遊び、石頭に参ず。正（貞）元初、寶通は龍川羅浮の瀑布巖に入居す。……五年（七八九）潮陽に歸る。明年、牛巖を門闢して精室を立つ。蛇虎皆な遠く遁ぐ。七年（七九一）又た邑西の幽嶺下に禪院を創建し、名づけて靈山と曰う。出入するに猛虎之に隨う。時に已に宗旨を大悟し、曹溪の緒を得。門人傳法の者は千餘人。自ら號して大顛和尚と爲す。元和十四年、刺史韓愈、潮州に貶せらる。地を遠くして與に語るべき無きも、大顛の名を聞き、召し至らしめて留めること十数日。其れ能く形骸を外にし、理自ら勝るを以て、得難きと爲し、圖りて與に往來せんと謂えり。海神を祭るに及んで潮陽に至り、遂に其の廬に造る。未だ幾ばくならざるに袁州に移るに復た衣を留めて別れを爲す。其れ見賞すること此の如し。長慶四年（八二四）、一日大衆に告辭して逝く。年九十三。云々」。「遠地無可與語……復留衣爲別」のところは、韓愈自身が、大顛との出遇いを語っている「與孟尚書書」（『朱文公校昌黎先生集』巻一八）の当該箇所を略記したもの。また大顛への手紙とされているもの「與大顛師書」（『外集』巻二）がある。柳田聖山「仏骨の表（韓愈と大顛）」（『禅文化』五一号）には、二人の交渉について詳しい論述がある。

〇軍州事＝役所の公務。軍と州は宋代の行政区画の名称。『碧巌録』六八則頌の著語、「盡四百の軍州に恁麼の人を

覓むるも也た得難し」（T四八―一九八b）。

○省要處＝かんどころ。『伝灯録』巻一八・鼓山章、「問う、如何なるか是れ省要の處。師曰く、還（は）た自ら耻ずるや」（T五一―三五一b）。

○師良久＝不二法問について最後に文殊に問われた維摩詰は黙然として無言（『維摩経』不二法門品）であったことを受ける。

○三平＝七八一―八七二。大顛に嗣ぐ。法名は義中（灯史類は義忠）、俗姓は楊氏、高陵（陝西省）の人。福州福唐県に生まる。十四歳のとき宋州（河南省）の玄用律師に依りて剃髪し、二十七歳のとき具足戒を受けた。初めに百巖懐暉大師に学び、西堂・百丈・石碧（鞏）を歴奉し、その後、大顛に参じた。宝暦の初め（八二五）漳州（福建省龍溪県）に行き、三平山に住するや、三百余人の問法者が常住した。武宗の破仏のとき三平山の深巌に入った。宣宗が即位して復仏するや、刺史の鄭薫は一年の内に寺を一新して旧のごとく開元寺と題額し、師を迎え入れた。咸通一三年（八七二）一一月六日示寂。享年九十二、僧臘六十五。伝記の第一資料は王諷撰「漳州三平大師碑銘并序」（『唐文粋』六四、『全唐文』七九一）。他に「漳州三平山広済大師行録」碑が現存し、黄仲琴「唐三平大師碑」（『嶺南学報』第三巻第二期）に全文が紹介されているが、『唐文粋』のものと異同が著しい。黄仲琴氏は、現存「行録」碑は偽作なるを考証され、偽作ではあっても精しいその伝は無視できないものがあると結んでおられる。他に『祖堂集』巻五、『伝灯録』巻一四、『聯灯会要』巻二〇、『五灯会元』巻五等がある。

○先以定動、後以智拔＝『大般涅槃経』師子吼品、「善男子、菩薩摩訶薩は二法を具足して能く大利益す。一には定、二には智。善男子、菅草を刈るに執ること急なれば則ち斷つが如し。菩薩摩訶薩は是の二法を修すること是の如し。善男子、堅木を拔くに先に手を以て動かせば後に則ち出で易きが如し。菩薩の定慧も亦復た是の如く、先に定を以

て動かし、後に智を以て拔く」（T一二―五四八b・七九三c）。

○門風＝風格、家風、宗風。『顔氏家訓』風操篇六、「篤學修行して門風を墜さず」。『祖堂集』巻三・慧忠章、「是れ我が宗門中、銀輪王の嫡子、金輪王の孫子にして方に始めて繼續するを得て、此の門風を墜さず」（『禅学叢書之四』、一―一一四）。

○介入處＝「介」については〔三四〕の「這介」の註を見よ。「入處」は手掛り、入口。『祖堂集』巻二・弘忍章、「某甲、黄梅に在りて剃髪すと雖も、實には宗乘の面目を得ず。今行者の指授を蒙る也、入處有り、人の水を飲みて冷暖自知するが如し」（『同』、一―八八）。

○典拠について＝『伝灯録』と明記されているが、『伝灯録』はこの話を録していない。この話を録するものとしては、『祖堂集』巻五・大顛章、『聯灯会要』巻二〇・韓愈章、『五灯会元』巻五・大顛章、『禅門拈頌集』巻九・大顛章などがあるが、『禅門拈頌集』が最もよく一致する。いま『禅門拈頌集』の該当箇所をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようになる。

大顛和尚。因韓①文公名愈問②、弟子軍州事多、省要處乞師一句。師良久。文公罔措。三平爲侍者、乃敲牀三下。師云、作麼。平云、先以定動、後以智拔。公乃禮謝三平云、和尚門風高峻、弟子於侍者邊得个③入處。（『高麗大蔵経』第四六、一五一頁上）

大字は共通するもの、小字は『禅門拈頌集』にのみ見えるもの。

① （唐）＋韓（宝蔵）　②（爲潮州刺史時）＋問＋（大顛和尚）（宝蔵）　③个＝介（宝蔵）

〔六五〕唐裴休相國

裴休相國、一日入開元寺、見壁間畫相、問院主云、壁間是什麼。主云、高僧。裴云、形儀可觀、高僧在什麼處。主無語。裴云、這裏莫有禪僧麼。主云、有一、希運上座頗似禪僧。裴遂召師來、擧前話似之。師召相公。公應喏。師云、在什麼處。裴於言下領旨。　傳燈録

*

裴休相國、一日開元寺に入り、壁間の畫相を見て院主に問うて云く、「壁間是れ什麼ぞ」。主云く、「高僧」。裴云く、「形儀觀る可し、高僧は什麼處にか在る」。主、語無し。裴云く、「這裏に禪僧有る莫きや」。主云く、「一有り、希運上座は頗る禪僧に似たり」。裴は遂に師を召し來たらしめ、前話を擧して之に似す。師、相公と召ぶ。公、應喏す。師云く、「什麼處にか在る」。裴、言下に於て旨を領す。　傳燈録

*

裴休が総理時代の或る日、開元寺にやってきた。壁にかかっていた（頂）相を指して、寺務長にきいた、

壁にかけてあるのは、誰の顔か、

長　偉いお坊さまです。

裴　顔かたちは判った、偉いお坊さまは何処にいらっしゃる、

主は答えようがない。

裴　この寺には、禅坊主がおるのか、

主　希運というのが一人、どうも禅坊主です。
裴休が呼びだすと、先生（希運）が出てきた、
先生　総理どの、
公は、ハイと答えた。
先生　何処にいらっしゃるか。
裴休は言下に、ヒントをつかんだ。

*

○裴休＝七九一―八六四。宣宗のもとで宰相をつとめ、貞観の余風があるといわれる宣宗朝の政治に関与して功績をあげた。真面目な儒者でありながら、篤く仏教を信奉し、圭峯宗密（七八〇―八四一）、東京封禅院円紹（八一一―八九五）、清涼澄観（七三八―八三九）、京師大安国寺端甫（七六一―八三六）、景山知玄（八〇九―八八一）、保寿院神智（八一九―八八六）、潙山霊祐（七七一―八五三）、黄檗希運、千頃楚南（八一三―八八八）等の多くの僧と交った。また宗密の『禅源諸詮集都序』『円覚経略疏』の序、黄檗『伝心法要』の序を書いている。『旧唐書』一七七、『新唐書』一八二。仏教側からの立伝には『伝灯録』巻一二、『聯灯会要』巻八、『五灯会元』巻四、『仏祖歴代通載』巻一七、『居士分灯録』巻上、『居士伝』巻四などがある。吉川忠夫「裴休伝」（『東方学報』第六四冊）は裴休の全体像を描いて力作であり、その生卒年を七九一―八六四と決定されている。
黄檗との出会いについて、『伝心法要』の序に自ら次のようにいう。「予は會昌二年（八四二）、鍾陵に廉たり。山より迎えて州に至り、龍興寺に憩わしめ、旦夕に道を問う。大中二年（八四八）、宛陵に廉し、復た去きて禮迎し所

部に至りて開元寺に安居せしめ、旦夕に法を受く。退いて之を紀すに十に一二を得たり。佩して心印となし、敢て發揚せず」（『禅の語録8』三頁）と。本則に見られる出会いのエピソードについては、既に元本『伝灯録』巻九の黄檗章の注に詳しい考証がなされているように、後の付会であろう。

○形儀可觀＝形儀は姿かたち、風采、容貌。黄滔「丈六全身碑」、「翼日、我公、之に禮閲するに、乃ち夢中の一類と其の形儀、長短大小、少しも差無し」（『全唐文』八二五）。『春秋左氏伝』襄公三十一年の末尾にいう、「君子は位に在れば畏るべし、施舍すれば愛すべし、進退度すべし、周旋則るべし、容止觀るべし、作事法なるべし、德行象どるべし、聲氣樂しむべし、動作文有り、言語章有り、以て其の下に臨めば、之を威儀有りと謂う」。

○開元寺＝洪州開元寺（大安精舎ともいう）。開元寺は、玄宗が開元二六年（七三八）に全国各州に設置した官寺。馬祖道一が大暦中（七六六―七七九）にここに住した。

○希運上座＝黄檗希運、福州閩県（福建省閩侯県）の人、入寂は大中年間（八四七―八六〇）で、生年及び年寿は不明である。郷里の福州黄檗山で出家し、江西に赴き、百丈の法を嗣ぎ、江西の高安県に黄檗山を開創する。身長七尺、額に円珠があったといわれる。一千人の弟子がいたとされ、会昌の排仏によって四散した弟子たちは、やがて各地にその法を伝える。そんな中に、臨済義玄（？―八六六）、睦州道蹤がいた。後に臨済禅が盛大となり、臨済宗の源流とされるに到る。伝記としては、『祖堂集』巻一六、『宋高僧伝』巻二〇、『景德伝灯録』巻一〇、『天聖広灯録』巻八などがある。他に、『宗鏡録』巻五、巻二四、『臨済録』の勘弁・行録、『林間録』、『正法眼蔵』『四家語録』『古尊宿語録』巻二、巻三等に語句及び『伝心法要』『宛陵録』を録す。

○典拠について＝『伝灯録』と明記されている。即ち『伝灯録』巻一二の裴休章であるが必ずしもよく一致しない。他にこの話を録すものに、『天聖広灯録』巻八、『聯灯会要』巻八、『五灯会元』巻四、『禅門拈頌集』巻一〇等

があり、最もよく一致するのは『禅門拈頌集』である。いま『禅門拈頌集』の該当箇所をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようである。

黄檗曾散衆、在洪州開元寺。裴①相國一日入寺②、忽見壁間畫像③、問院主云、壁間是什麼。主云、高僧。裴云、形儀可觀、高僧在甚④麼處。主無語。裴云、者⑤裏莫有禪僧麼。主云、有一、希運上座頗似禪僧。裴遂召師⑥、擧前話似之。師云、但請問來。裴云、形儀可觀、高僧在甚麼處。師召相公。公應喏。師云、在甚③麼處。裴於言下領旨。（『高麗大蔵経』第四六、一六六頁上）

大字は共通するもの、小字は『禅門拈頌集』のみにあるもの。

①裴＋（休）（宝蔵）　②（開元）＋寺（宝蔵）　③像＝相（宝蔵）　④甚＝什（宝蔵）
⑤者＝這（宝蔵）　⑥師＋（來）（宝蔵）

〔六六〕朗州刺史李翺

朗州刺史李翺問藥山和尚、如何是道。師以手指上下曰、會麼。云、不會。師曰、雲在青天水在瓶。翺乃呈偈曰、鍊得身形似鶴形、千株松下兩函經。我來問道無餘説、雲在青天水在瓶。　傳燈録

＊

朗州刺史李翺、藥山和尚に問う、「如何なるか是れ道」。師、手を以て上下を指ざして曰く、「會するや」。云く、

「會せず」。師曰く、「雲は青天に在り、水は瓶に在り」。翺乃ち偈を呈して曰く、「鍊得せし身形は鶴形に似たり、千株の松下に兩函の經。我れ來たりて道を問うも餘説無し、雲は青天に在り水は瓶に在り」。　傳燈録

*

朗州の知事であった李翺は、薬山和尚に（次のように）きいた、どういうものが道ですか。
和尚は手で上下を指し示した、判るか。
判りません。
青い空には（白い）雲が似合う、浄瓶の中には、水が入っている。
翺はそこで（次のような）偈を献じた、
煉りあげた身体は、まるで鶴のようにスリム。
（すっきりと整った）千本の松の林には、（古仏の）経巻が二箱。
私が道をききに来ても、余計なことは何も答えず、
青い空には（白い）雲が似合う、浄瓶の中には、水があるだけだ。

*

○李翺＝生没年不明。韓愈の門人。字は習之。唐の徳宗の貞元一四年（七九八）の進士、憲宗の元和元年（八〇六）国

子博士、史館修撰となる。諫議大夫李景倹に信任されたが、元和一五年（八二〇）景倹の事に坐して朗州の刺史に左遷される。景倹がもとの職に復帰するにおよんで礼部郎中となる。太和初（八二七）諫議大夫となり、三年に中書舎人となる。後、桂管湖南観察使、山南東道節度使を歴遷し、会昌中（八四一―八四六）に卒し、文公と諡された。『旧唐書』一六〇、『新唐書』一七七に立伝され、『李文公集』十八巻がある。『復性書』は、仏教思想の影響を受けて、性に関する新解釈を明らかにして新しい人間像を示したもので、中国哲学思想上に一つの地位を占め、宋儒の思想に影響を及ぼした。薬山との出会いは、元和一五年（八二〇）に朗州刺史に左遷されたときのことであろう。他に西堂智蔵、鵝湖大義、紫玉道通、龍潭崇信等の禅僧とも交渉があった。

○薬山和尚＝薬山惟儼（生没年異説有り）。『宋高僧伝』巻一七が伝記に関する第一資料で、『祖堂集』巻四、『伝灯録』巻一四、巻二八に多くの語句を録している。他に唐伸なる人の撰になる『澧州薬山故惟儼大師碑銘并序』（『唐文粋』六二、『全唐文』五三六所収）があるが、石頭との関係は記さず、馬祖との因縁を強調しており、五家の全てを馬祖より発するものとせんがために偽作されたものとされ、その信憑性が疑われている（宇井伯寿『第二禅宗史研究』四二五頁以下）。師、石頭に嗣ぐ。諱は惟儼、姓は韓、絳州（山西省新絳県）の人。後、南康（江西省南康県）に移る。十七歳のとき、潮州（広東省潮安県）西山の慧照禅師に依って出家し、大暦八年（七七三）衡岳の希操律師について受戒した。ある日、「大丈夫は当に法を離れて自ら浄なるべし、豈に能く屑屑と細行を布巾に事とせんや」と反省し石頭に謁し、玄旨を密領した。貞元（七八五―八〇五）の初め頃より、澧陽（湖南省澧県）の薬山に住し、村長より牛小屋をもらいうけ僧堂とした。入寂年には異説がある。『祖堂集』は、太和八年（八三四）一一月六日、春秋八十四、僧夏六十五。『伝灯録』は太和八年、春秋八十四、僧夏六十。『宋高僧伝』は、太和二年（八二八）、春秋七十。唐伸撰『惟儼大師碑銘并序』は、太和二年十二月六日、春秋八十四、僧夏六十とする。これらの説に対して、

『釈氏疑年録』は、『祖堂集』『伝灯録』の説を取って、七五一―八三四年とし、『禅学大辞典』は宇井伯寿『第二禅宗史研究』の説を取っており、それはまさに『碑銘并序』と一致している（『馬祖の語録』一〇九頁より載録）。論文に、福島俊翁「李翺の禅学と復性書」（『禅学研究』五一号、一九六一年）、柳田聖山「雲は青天にあり水は瓶中にあり―薬山と李翺―」（『禅文化』六六号、一九七二年）がある。

○雲在青天水在瓶＝薬山のいまいる眼前の如如なる実景。雲は天にあるし、飲み水はちゃんとポットに入っている。それぞれがその在るべき位置に住在している。『法華経』方便品の句、「是（あらゆ）る法は法位に住して、世間相も常住」（T九―九b）。

○呈偈云……＝『全唐詩』三六九に「薬山の高僧惟儼に贈る二首」の一首として収められている。他の一首は、「選得幽居愜野情、終年無送亦無迎。有時直上孤峯頂、月下披雲嘯一聲」。

○兩函經＝二箱に収められた経典、かなり大部である。『宗鏡録』巻一に「只だ薬山和尚の如きは、一生、大涅槃經を看（よ）み、手より巻を釋（はな）さず」（T四八―四一八a）とあるように、恐らくは『涅槃経』であろう。

○典拠について＝『伝灯録』と明記されている。いま東禅寺版『伝灯録』巻一四・薬山章の該当箇所をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようである。

朗州刺史李翺、嚮師玄化、屢請不起、乃躬入山謁之。師執經卷不顧。侍者白曰、太守在此。翺性褊急、乃言曰、見面不如聞名。師呼太守。翺應諾。師曰、何得貴耳賤目。翺拱手謝之。問①曰、如何是道。師以手指上下曰、會麼。翺曰②、不會。師曰、雲在天③水在缾④。翺乃欣愜作禮、而述⑤偈曰、練⑥得身形似鶴形、千株松下兩函經。我來問道無餘説、雲在青天水在缾④。（禅文化研究所影印本、二七四頁）

大字は共通する文字、小字は『伝灯録』にのみある文字。

①問＋（薬山和尚）（宝蔵）　②曰＝云（宝蔵）　③（青）＋天（宝蔵）　④缾＝瓶（宝蔵）
⑤述一＝呈（宝蔵）　⑥練＝錬（宝蔵）

他に『祖堂集』巻四・薬山章、『宋高僧伝』巻一七・薬山伝、『宋門統要集』巻七・李翺章、『正法眼蔵』巻中、『聯灯会要』巻一九・李翺章、『五灯会元』巻五・李翺章、『禅門拈頌集』巻九・薬山章にも収録される。これらの中で『宝蔵録』と最もよく一致するのは、『禅門拈頌集』である。そこで『禅門拈頌集』の該当箇所をベースにして異同を示すと次のようである。

薬山因朗州刺史李翺問①、如何是道。師以手指上下曰、會麼。翺曰②、不會。師曰、雲在青天水在瓶。翺乃呈偈曰、錬得身形似鶴形、千株松下兩函經。我來問道無餘説、雲在青天水在瓶。（『高麗大蔵経』第四六、一四五頁上）

大字は共通する文字、小字は『禅門拈頌集』にのみある文字。
①問＋（薬山和尚）（宝蔵）　②曰＝云（宝蔵）

〔六七〕王常侍參睦州

王常侍來參睦州。州問曰、今日何故入院遲。侍曰、看馬打毬。師曰、人困麼。曰、困。馬困麼。曰、困。露柱困麼。侍茫然無對。歸至私第、中夜間忽然省得。明日見師云、某會得昨日事也。師曰、露柱困麼。侍曰、困。師遂許之。

*

王常侍來たって睦州に參ず。州問うて曰く、「今日は何の故に院に入ること遅きや」。侍曰く、「馬して打毬するを看る」。師曰く、「人困ずや」。曰く、「困ず」。「馬困ずや」。曰く、「困ず」。「露柱困ずや」。侍、茫然として對うる無し。私第に歸至し、中夜間に忽然と省得す。明日、師に見えて云く、「某、昨日の事を會得せり」。師曰く、「露柱困ずや」。侍曰く、「困ず」。師遂に之を許す。

傳燈録

*

王常侍が、睦州に参じていたとき、州が（常侍に）きいた、今日はどうして寺に来るのが、遅れたのか。

（途中で）ポロを見ておりました。

騎手は、へたったか。

へたりました。

馬もへたったか。

へたりました。

露柱もへたったか。

常侍は（何のことか）見当がつかず、答えようがなかった。

下屋敷に退って、その真夜中になって、忽然と（睦州の問題に）気が付いた。

明くる朝、先生におめどおりするや、私、昨日のことが判りました。

露柱はへたったか。

へたりました。
先生は始めて、常侍を許した。

*

○王常侍＝不詳。常侍は官名。内官で侍従官のこと。散騎常侍といい、唐代には左散騎常侍（門下省）と右散騎常侍（中書省）があった。しかし、ここでは実官でなく、地方の権力者に与えられた肩書としての称号。禅門に於て、王常侍と呼ばれる人に次の四人がいる。馬祖に嗣いだ無等禅師と会見した随州王常侍（『伝灯録』巻七・無等章）、潙山に嗣いだ襄州王敬初常侍（『祖堂集』巻一九、『伝灯録』巻一一）、『臨済録』上堂に登場する王常侍、それに睦州に参じた王常侍である。『宗門統要集』や『聯灯会要』の宋代の資料では、王敬初常侍と『臨済録』の王常侍を同一人物と見なし、『禅宗頌古聯珠通集（増集）』『先覚宗乗』『居士伝』などの元・明代の文献になると、それに睦州に参じた王常侍をも加えた三人を同一人物として扱っている。もとより、三人を同一人物とする資料はない。

○睦州＝黄檗希運に嗣ぐ。名は道蹤、或は道明とも。俗姓は陳氏。初め筠州（江西省高安県）の米山に住し、次に睦州（浙江省建徳県）観音院（或は龍興寺）に住すること数十年。後に衆を捨てて開元寺の房に住み、蒲鞋を作って鬻ぎ、老母を養った。そのため陳蒲鞋とあだ名された。若き日の雲門が彼に参じ、右足を扉にはさまれ、歩行が不自由になったことは有名。臨済が黄檗会下にあって、行業純一であったとき、黄檗に参禅するよう勧めた首座を睦州とする説（恵洪「陳尊宿影堂序」）が宋代になってあらわれるが、これは雲門と臨済を結びつけようとする意図から出たものであろう。『釈氏稽古略』巻三（T四九―八四三a）は、寿九十八、臘七十六、乾符四年（八七七）の寂とする

が、雲門の生没年（八六四―九四九）から考えると、乾符四年の寂は信用できない。『祖堂集』巻一九（五―一〇四）、『伝灯録』巻一二（T五一―二九一a）、『聯灯会要』巻八（Z一三六―二八五b）、『五灯会元』巻四（Z一三八―八〇b）に伝がある。語録は、『古尊宿語要』巻一（禅学叢書之一）、『古尊宿語録』巻六（Z一一八）に収められている。また恵洪の『石門文字禅』巻二三に「陳尊宿影堂序」がある。しかしそのいずれにも、王常侍の話は出てこない。

○馬打毬＝騎馬にして棒で木毬を打ち、ゴールを争うゲーム。ポロのこと。『全唐詩』五六・王建の宮詞の一節に、「寒食、宮人歩して打毬す」とあり、〝打毬〟には、騎馬せずに行うものがあったらしい。向達「長安打毬小考」（『唐代長安与西域文明』所収、一九五七年）、羅香林「唐代波羅毬戯考」（『唐代文化史』所収、一九五五年）に詳しい考証がある。守屋美都雄訳注・布目潮風他補訂『荊楚歳時記』（『東洋文庫』三二四、一九七八年）に、先の二氏の考証を踏まえつつ〝打毬〟についての詳しい注がある。その注に「唐代後半期になると、節度使管下に毬場が置かれたことが『資治通鑑』等の史料に散見する。これは打毬の普及を示すものであるが、一方では職業軍人の出現とスポーツ＝兵勢を考える上で興味深い」とあり、ここも地方軍閥の軍人調練のためのものであったかもしれない。

○露柱困麽＝打毬を観戦していた露柱は疲労したか。露柱は具体的にどういうものであるのか不詳。禅では情識を絶すことで却って丸ごとの真実の具現としての高い象徴性をもつものとして言及されることが多い。ここでは、枯木寒灰の心境になろうと修行している王常侍その人に見たてていよう。或は、意表外の問いを発することで、枯木寒灰の心境に落ち着くことをもってよしとする常侍にゆさぶりをかけて、業識を取り戻させようとするものか（すぐ後の「師遂許之」の注を参照）。

○侍曰、困＝ヘトヘトです。「生即無生、無生即生」の消息はまさに露柱が困ずるところ。

○師遂許之＝枯木寒灰の心境を脱して、業識を認めたことを評価した。龍門仏眼清遠（一〇六七―一一二〇）は、この則に対して次のようにコメントする。「此れは是れ達磨大師の宗旨なり。露柱は打毬すること解（あた）わず。如何が却って困ずや。還た明らめ得る者有るや。人困じ馬困ずは、未だ是れ困ずるに非ず。露柱が困じて始めて是れ困ずなり。言下に無生を證するに好し。言中に向って尺寸を尋ぬる莫れ。百丈若し雙耳聾する無くんば、臨濟爭でか解く三頓を領せん。盡く業識を將て流傳を作す。此の道は今人、棄てて糞の如し」とあり、百丈・黄檗・臨済は皆な生死の根本としての業識を見きわめることで、達磨の宗旨を伝えてきたが、今日の人は、此の道を糞のように棄てているとし、枯木寒灰の情識を絶した心境に安住することを批判している。

○典拠について＝『伝灯録』と明記されているが、『伝灯録』には収録されていない。この話を録す最古の資料は『薦福承古禅師語録』（Z一一八―二六五b、『古尊宿語録』巻二九）の上堂中に見られるが、王常侍との問答となっており、以後の資料はこれを受ける。『禅門拈頌集』巻一六・睦州章、『禅門頌古聯珠通集（増収）』巻二六、『指月録』巻一三、『居士分灯録』巻上、『先覚宗乗』巻二、『居士伝』巻一八の王敬初章にも収録されている。陳操尚書が王常侍にすり替えられたのは、睦州と臨済の関係を繋ぐために要請されたものであろう。いま『禅門拈頌集』巻一六・睦州章の該当箇所をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようである。

睦州因王常侍來參①乃問②曰、今日何故入院遲。侍曰、爲看馬打毬、所以來遲。師曰、人打毬、馬打毬。侍曰、人打毬。師曰、人困麽。侍曰、困。馬困麽。侍曰、困。露柱困麽。侍茫然無對。歸至私第、中夜間忽然省得。明日見師云、某會得昨日事也。師曰、露柱困麽。侍曰、困。師遂許之。（『高麗大蔵経』第四六、二七〇頁上）

大字は共通する文字、小字は『拈頌集』にのみある文字。

①參＋（睦州）（宝蔵）　②（州）＋問（宝蔵）

〔六八〕龐居士蘊

龐居士蘊初參石頭、忘言會旨。一日頭問曰、子見老僧已來、日用事作麼生。對曰、若問日用事、即無開口處。復呈一偈云、日用事無別、唯吾自偶諧。頭頭非取捨、處處勿張乖。朱紫誰爲號、丘山絶點瑕。神通并妙用、運水及般柴。頭然之。後之江西、參問馬祖云、不與萬法爲侶者、是什麼人。祖云、待汝一口吸盡西江水、即向汝道。居士言下領旨。有偈曰、有男不婚、有女不嫁。大家團欒頭、共説無生話。　傳燈録

*

龐居士蘊、初めて石頭に參じ、言を忘じて旨を會す。一日、頭問うて曰く、「子老僧に見えてより已來、日用の事は作麼生」。對えて曰く、「若し日用の事を問わるれば、即ち口を開くの處無し」。復た一偈を呈して云く、「日用の事は別無し、唯だ吾れ自ら偶諧するのみ。頭頭取捨に非ず、處處張乖勿し。朱紫誰か號を爲す、丘山點瑕を絶す。神通并びに妙用、水を運び及た柴を般ぶ」。頭、之を然りとす。

後に江西に之き、馬祖に參問して云く、「萬法と侶爲らざる者、是れ什麼人ぞ」。祖云く、「汝が一口に西江の水を吸い盡すを待ちて、即ち汝に向って道わん」。居士、言下に旨を領す。偈有りて曰く、「男有るも婚せず、女有るも嫁がず。大家團欒頭、共に無生の話を説く」。

*

龐居士（いみなは蘊）は、始めて石頭に参じて、言葉によることなしに、（禅の）勘どころを把んだ。
ある日、頭が（次のように）きいた、そなたが老僧に参じてからの、毎日のありようはどうか。
毎日のありようと言われても、口に出して答えようがありません。
そこで一偈をまとめて、（石頭に）献じていうのに。
毎日のありように、格別のことはござらぬ、ただ偶然にこちらにピタリと、くるだけ。
何一つ、取ったり捨てたりするでなし、
何処でも（巧くいって）、ギクシャクすることがない。
紅綬だ紫綬だと、誰も称号をくれるでなし、
この山中に、一点の傷もつけようはない。
マカフシギの超能力、霊妙な作用とは、
水を運び薪を負う、（毎日の動き）以外にないだろう。
頭は（居士の偈を）みとめた。
その後、（居士は）江西に出かけた。馬祖に質問するには、どんな対象とも関係をもたない自由人とは、いったいどんな男でしょう。
祖　君がまず、一口に西江の水を呑みほす、そこでこそ、私がその男に答える番だな。
居士は言下に、（馬祖の）心を把んだ。

そこで、次のような偈ができた、
私の息子は、嫁をとらず、
私の娘は、他家へはやらぬ。
大勢で一家ダンラン。
わいわいと、生れぬ前の話のあけくれ。

*

○石頭＝七〇〇―七九〇。青原行思（？―七四〇）に嗣ぐ。俗姓は陳氏、端州高要（広東州高要県）の人。六祖慧能が最晩年に故郷の新州（広東省新興県）国恩寺に帰った機会に行きて礼謁し、剃髪して弟子となった。開元一六年（七二八）、羅浮山（広東省増城県）で具足戒を受け、戒を見極めるや、末節にこだわらなくなった。また僧肇の『涅槃無名論』を読みて得るものがあった。後に廬陵青原山（江西省吉安県）の行思禅師に師事した。その遷化後の天宝初（七四二）に衡岳南台に入り、寺の東の台状の石上に庵を結んだので、石頭和尚と呼ばれることとなった。広徳二年（七六四）、門人慧朗の請により潭州梁端（湖南省）に一時的に下り、広く接化を行ったことがあった。貞元六年（七九〇）一二月二五日示寂、春秋九十一、僧夏六十三、南岳の東嶺に塔が立てられた。長慶中（八二一―八二四）、劉軻が碑文（不伝）を撰した。その一節に「江西の主は大寂、湖南の主は石頭、往來憧憧として、二大士に見（まみ）えざるは無知と爲す」とあり、当時、馬祖と禅界を二分した。『祖堂集』巻四、『宋高僧伝』巻九、『伝灯録』巻一四、『聯灯会要』巻一九、『五灯会元』巻五に略伝と問答語句を録す。『南嶽総勝集』にも記事がある。『伝灯録』巻

三〇に、この人の作品として「参同契」と「草庵歌」を収録している。

○龐居士＝〔六一〕の注を見よ。

○忘言會旨＝『荘子』外物、「言は意に在る所以、意を得て言を忘る」。陳師道「次韻徳麟植檜」にいう、「蕭蕭たる孤竹君、言を忘じて理相い契う」。

○日用事＝日常のくらしぶり、日々の生き方。『伝灯録』巻一九・金輪可観禅師、「問う、如何なるか日用の事。師、掌を拊つこと三下す。僧云く、學人未だ此の意を領ぜず。師曰く、更に什麼をか待たん」（T五一―三五六b）。

○偶諧＝偶然に事がうまくいくこと。貫休「山居詩二十四首」第二〇首にいう、「常に願う山に居して事偶諧せんことを」（『全唐詩』八三七）。

○頭頭非取捨＝一つ一つの事柄に価値判断して撰び取ったり捨てたりしない。「頭頭」は一つ一つ。『伝灯録』巻一七・雲居章、「頭頭上に具わり、物物上に新たなり」（T五一―三三五c）。『馬祖語録』、「何をか平常心と謂う。造作無く、是非無く、取捨無く、斷常無く、凡無く聖無し」（『馬祖の語録』三二頁）。また『信心銘』に、「至道は難無し、唯だ揀択を嫌うのみ。但だ憎愛莫くんば、洞然として明白なり」（T五一―四五七a）。

○張乖＝運が離れて物事が順調に運ばぬこと。「乖張」が普通であり、押韻のために「張乖」となったもの。『拾得詩』二〇首、「一朝乖張有れば、過咎は全て你に歸す」（禅の語録13『寒山詩』四四一頁）。

○朱紫誰爲號＝朱衣や紫衣、称号など誰が着けるのやら、私には関係がない。

○神通并妙用、運水及般柴＝水を運び柴を搬ぶという日常の働きそのものが、神通妙用なる仏行に他ならない。「作用即性」という馬祖禅を受ける。『血脈論』、「佛とは西國の語なり、此の土には覺性と云う。覺とは是れ靈覺なり。機に應じて物に接し、眉を揚げ瞬目し、手を運かせ足を動かすは、皆な是れ自己靈覺の性なり。性は即ち是れ

心、心は即ち是れ佛、佛は即ち是れ道、道は即ち是れ禪なり」（T四八―三七五a）。入矢義高訳注『龐居士語録』（『禅の語録7』一七頁）に詳しい注解がある。

○馬祖＝〔二六〕の注を見よ。

○不與萬法爲侶者、是什麼人＝一切の存在と関わりをもたぬ者とは、これこれだと措定できぬ者であり、思慮言語を超出している。従って定言的な一切の答え方を許さぬものである。独立自存の人の気概を持って打って出た居士ではあったが、うっかりそのことを見落としていた。馬祖の切り返しによって、ハッと気付いたわけであろう。

○待汝一口吸盡西江水、即向汝道＝「居士が一口で西江水を飲み切ったなら答えてやろう、飲み切った居士がその者だと」。不可能を居士自身に突き返すことで、その問いの無意味さ、愚かさを見せつけた。

○有男不婚……＝居士一家の仏法に身を捧げた如法な生活ぶりをうたう。「無生」とは、一切の存在はもともと無生無滅であり、因縁によって仮りに生滅の相をもって現象し、固定的な実体をもたぬことであり、「空」と同義である。「無生話」とは、万法と侶たらざる者のことを話すことでもあろう。

○典拠について＝『伝灯録』と明記されている。そこで東禅寺版『伝灯録』巻八・龐蘊章の該当箇所をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようである。

襄州居士龐蘊者、衡州衡陽縣人也。字道玄。世以儒爲業。而居士少悟塵勞、志求眞諦。唐貞元初、謁石①頭和尚、忘言會旨。復與丹霞禪師爲友。一日石頭問曰、子自見老僧已來、日用事作麼生。對曰、若問日用事、即無開口處。乃②呈一偈云、日用事無別、唯吾自偶諧。頭頭非取捨、處處勿張乖。朱紫誰爲號、丘山絶點埃③。神通并妙用、運水及般柴。石頭然之。曰、子以緇耶素耶。居士曰、願從所慕。遂不剃染。後之江西、參問馬祖云、不與萬法爲侶者、是什麼人。祖云、待汝一口吸盡西江水、即向汝道。居士言下頓領玄要④。乃留駐參承、經涉二載。有偈曰、有男不婚、有女不嫁。大家團欒頭、共

説無生話。自爾機辯迅捷、諸方嚮之。（禅文化研究所影印本、一三〇頁下）

大字は共通する文字、小字は『伝灯録』にのみある文字。

①（龐居士蘊初參）＋石（宝蔵）　②乃＝復（宝蔵）　③埃＝瑕（宝蔵）　④要＝旨（宝蔵）

〔六九〕張拙秀才

張拙秀才因訪石霜。霜問曰、公何姓。曰、姓張。曰、何名。曰、名拙。霜曰、覓巧了不可得、拙自何來。公於言下有省。乃述悟道頌曰、光明寂照遍河沙、凡聖含靈共我家。一念不生全體現、六根纔動被雲遮。斷除煩惱重増病、趣向菩提亦是邪。隨順衆縁無罣礙、涅般生死是空花。　祖廷録

＊

張拙秀才、因に石霜を訪ぬ。霜、問うて曰く、「公は何の姓なるや」。曰く、「姓は張なり」。曰く、「何の名なるや」。曰く、「名は拙なり」。霜曰く、「巧を覓むるも了に不可得、拙何より來たる」。公、言下に於て省有り。乃ち悟道の頌を述べて曰く、「光明寂照して河沙に遍ねく、凡聖含靈共（みな）我が家。一念生ぜずして全體現われ、六根纔かに動くや雲に遮（とざ）さる。煩惱を斷除するは重ねて病を増し、菩提を趣向するも亦た是れ邪なり。衆縁に隨順して罣礙無く、涅般生死は是れ空花」。　祖廷録

＊

張拙という、国家試験に合格したばかりの役人のたまごが、あるとき石霜を訪ねた。

霜　貴公、名字は何か。

名字は、張氏。

いみなは。

いみなは、拙。

霜　巧妙を願っても、どうにもならんものだ。特に拙と（下手に）来ることはない。

公は言下に、気付くところがあった。そこで（次のような）悟道の歌を献じた。

（仏の）光明が静かに輝いて、ガンジス河の沙の一粒一粒を、くまなく照しだす。

凡夫も聖者も、およそ心ある生きものは、すべて我が家族。

分別の思いは、チラとも起きず、全体がまる見えになっている。

眼と耳と鼻と口と、身と心の六つの器官が、チラと動いたそのとたん、もう雲に覆われてしまうのだ。

迷い（の雲）を払おうとして、いよいよ病いがかさなり、

悟りを求めるのも、もとより間違い。

さまざまの対象につきあって、何の差し支えもない。

涅槃（の悟り）も生死（のくりかえし）も、共に（眼の病いゆえの）空に咲く花。

*

○張拙＝禅録に録されていること以外は不明。『祖堂集』巻六・石霜章に既にこの話が録されており、恐らく実在の人なのであろう。『聯灯会要』巻二二、『五灯会元』巻六、『指月録』巻一七、『五灯厳統』巻六、『居士分灯録』巻上、『先覚宗乗』巻三、『居士伝』巻一八に張拙章があり、禅月大師貫休の指示により、石霜に参じたとして、本話を録している。また『禅門拈頌説話』巻二五・光明條に「祖燈本傳云」として本話の経緯を記す。

○秀才＝漢代より官吏登庸科目の名。唐の貞観（六二七―四九）の頃より廃れたが、進士を秀才と呼ぶようになった。科挙の合格者。またその受験資格を有する者を指す。『事物紀原』巻三・学校貢挙部第一六、「秀才。漢の世に士を取ぶに、又た孝廉・秀才の二等有り。齊・宋以來、州に秀才の舉有りて、隋・唐の代、其の科最上なり。貞觀中、舉して第せざる者有れば、其の州の長を坐す、是れ由り其の科廢る。故に唐より宋に及んで、進士なりと雖も猶お秀才を以て號と爲す、唐・漢の舊よりなり。……李肇の國史補に曰く、進士は時の尚ぶ所と爲りて久し。俊乂實に其の中に在り、此れ由り出ずる者は、終身文人爲り、其れ通稱して之を秀才と謂う。……肇は元和中の人なり。蓋し憲宗の時より、已に進士の稱と爲る」。

○石霜＝石霜慶諸。八〇七―八八八。諱は慶諸、姓は陳氏、廬陵新淦（江西省清江県）の人。十三歳で出家し、二十三歳のとき嵩嶽で具足戒を受けた。潙山霊祐（七七一―八五三）に参じた後、長沙の道吾円智（七六九―八三五）の法を嗣ぐ。『祖堂集』では三十五歳のとき石霜山に入り、生涯この山を出なかったという。洞山良价（八〇七―八六九）の「直に須らく万里寸草も無き処に向って去って始めて得べし」に対して、「門を出づれば便ち是れ草」のコメントをしたことを聞いた洞山が、「大唐国内能く幾人か有らん」と賞賛したことによって世に知られることとなる。洞山の亡き後、その弟子たちが錫を石霜山に移したと『禅林僧宝伝』はいう。天下は石霜山の家風を枯木衆と呼んだ。法系は次のようである。

石頭希遷——薬山惟儼——雲巌曇晟——洞山良价
　　　　　　　　　　——道吾円智——石霜慶諸——張拙
　　　　　　　　　　——船子徳誠——夾山善会

『祖堂集』巻六、『宋高僧伝』巻一一、『伝灯録』巻一五、『聯灯会要』巻二〇、『禅林僧宝伝』巻五、『五灯会元』巻五に略伝及び問答語句を録す。

○覔巧了不可得、拙自何來＝張拙の名に引っかけて、不去不来の本来の自己のありようを唆示する。巧と拙については、『老子』洪徳篇第四十五、「大直は屈の若く、大巧は拙の若く、大辯は訥の若し」。

○悟道頌……＝雲門文偃がこの頌を取り挙げたことによって、宋代に有名となる。『雲門広録』巻中にいう、「擧す。光明寂照遍河沙。僧に問う、豈に是れ張拙秀才の語ならずや。僧云く、是なり。師云く、話墮なり」（T四七—五五七c）。大慧『正法眼蔵』巻五（Z一一八—五五d）や『無門関』第三九則は、この「雲門話墮」がテーマとなっている。『朱子語録』（巻五一、六二、六九、一二六）は、性に関わる問題でこの頌を引くことが多い。道元『正法眼蔵』「空華」の巻は、悟道頌の一句ごとにコメントを付している。

○光明寂照遍河沙＝「光明」は人人本具の心性、自性清浄心。『伝灯録』巻一〇・長沙章、「盡十方世界は是れ沙門の眼、盡十方世界は是れ沙門の全身、盡十方世界は是れ自己の光明、盡十方世界は是れ自己の光明裏に在り」（T五一—二七四a）。同じく巻九・福州大安章、「汝諸人各自に無價の大寶有りて、眼門より光を放ちて山河大地を照らす。耳門より光を放ちて一切善悪の音響を領覧す。六門、晝夜に常に光明を放つ、亦た放光三昧と名づく」（T五一—二六七c）。

「寂照」は、自性清浄心（仏）の空寂なる働き。『菩薩瓔珞本業経』巻下、「如來は無心無色にして、一切法を寂

照す」（T二四―一〇一八b）。『禅源諸詮集都序』、「煩悩盡くる時、生死即ち絶し、生滅滅し已り、寂照現前し、應用窮まる無し、之を名づけて佛と爲す」（T四八―四〇三a）。『観無量寿経』、「無量寿佛に八萬四千の相有り、一一相中に各おの八萬四千の隨形好有り。一一好中に八萬四千の光明有り。一一光明は十方世界を遍照す」（T一二―三四三b）。

○凡聖含靈＝達摩『二入四行論』、「理入とは、教に藉りて宗を悟り、深く含生凡聖同一眞性にして、但だ客塵に妄覆され、顯了すること能わざるのみなるを信ずるを謂う」（『達摩の語録』三一頁、筑摩書房）。「含靈」は有情のもの。

○一念不生＝『禅源諸詮集都序』、「頓悟頓修とは、此れ、上上智の根性・樂欲俱に勝れ、一聞千悟にして大總持を得、一念不生、前後際斷を説く」（T四八―四〇七c）。また白居易詩「神照禅師同宿」、「宴坐して自ら相對す、密語誰か知るを得ん。前後際斷の処、一念不生の時」（『白氏文集』巻六二）。

○斷除煩悩＝誌公和尚『十四科頌』の「生死不二」にいう、「若し煩悩を斷除せんと欲せば、是れ無明の癡漢なり」（T五一―四五一b）。

○趣向＝目標・ゴールを目差す。『伝灯録』巻一〇・趙州章、「南泉に問う、如何なるか是れ道。南泉曰く、平常心是れ道。師曰く、還た趣向すべきや。南泉曰く、向わんと擬すれば即ち乖く」（T五一―二七六c）。

○空花＝眼を病む者が空中に見る花。妄想の産物、実体のないものの喩え。『円覚経』、「善男子よ、一切衆生は無始從り來かた、種種に顚倒すること、猶お迷人の四方に處を易うが如し。妄に四大を認めて自身の相と爲し、六塵の縁影を自心の相と爲す。譬えば彼の目を病むものの、空中の花及び第二の月を見るがごとし。善男子よ、空には實に花無し、病む者妄執し、妄執に由るが故に、唯だ此の虚空の自性に惑うのみに非ず、亦復た彼の實に花の生ず

る處を迷（みうし）なう」（T一七―九一三b）。『伝灯録』巻一〇・芙蓉山霊訓章、「初めて歸宗に參じて問う、如何なるか是れ佛。宗曰く、我れ汝に道えば、汝還た信ずや。師云く、和尚誠實の言を發せば、何ぞ敢て信ぜざらん。宗曰く、即ち汝便ち是れなり。師曰く、如何が保任せん。宗曰く、一翳眼に在れば、空華乱墜す」（T五一―二八〇c）。

○典拠について＝『祖廷録』と明記される。廷は庭に同じ。〔三五〕の典拠として既に出ている。そこでは『祖庭事苑』との関係が深いことを述べたが、ここでも『祖庭事苑』巻一・雲門室中録の「拳光明寂照」の項に本則が引かれている。いま、それをベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようになる。

因僧擧光明寂照徧河沙。師云、豈不是張拙秀才語。僧云、是。師云、話墮也。此緣印本語意倒錯、而或謂張拙爲相公、因録其緣、以示學者。拙唐人也。因①訪石霜、霜問曰、公何姓。曰、姓張。何②名。曰、名拙。霜曰、覓巧了不可得、拙自何來。公於言下有省。乃述悟道頌曰、光明寂照徧③河沙、凡聖含靈共我家。一念不生全體見④、六根才⑤動被雲遮。斷除煩惱重增病、趣向眞⑥如總⑦是邪。隨順衆緣無罣礙、涅盤⑧生死是空花。（Z一一三―九c）

大字は共通する文字、小字は『祖庭事苑』に見える文字。

①（張拙秀才）＋因（宝蔵）　②（曰）＋何（宝蔵）　③徧＝遍（宝蔵）　④見＝現（宝蔵）
⑤才＝纔（宝蔵）　⑥眞如＝菩提（宝蔵）　⑦總＝亦（宝蔵）　⑧盤＝般（宝蔵）

他にこの話を録すものとして、『祖堂集』巻六・石霜章（二―七四）、『正法眼蔵』巻五（Z一一八―五五d）、『聯灯会要』巻二二・張拙章（Z一二六―三九七c）、『五灯会元』巻六・張拙章（Z一二八―一〇〇c）等があるが、『祖庭事苑』のものが最もよく一致する。参考として『祖堂集』のものを記すと次のようである。

師問張拙秀才、汝名什摩。對曰、張拙。師云、世間文字、有什摩限、名什摩拙。對曰、覓个巧處不可得。師云、也只是个拙。張秀才有偈曰、光明寂照遍恆沙、凡聖含靈共一家、一念不生全體現、六情纔動被雲遮、遣除煩惱重

増病、趣向眞如亦是邪、任逐境縁無罣得（碍）、眞如凡聖是空花。

〔七〇〕范文粹居士

范文粹居士、久參南陽襲燈禪師、未有悟入。一日聞漁笛忽悟。次日呈投機偈曰、香嚴和尚大慈悲、悟我眞乘破宿疑。寶藏金文五千軸、夜來都向笛中吹。　五燈會元

＊

范文粹居士、久しく南陽の襲燈禪師に參ずるも、未だ悟入有らず。一日、漁笛を聞きて忽まち悟る。次の日、投機の偈を呈して曰く、「香嚴和尚大慈悲なり、我に眞乘を悟らしめて宿疑を破す。寶藏金文の五千軸、夜來都て笛中向（よ）り吹かる。　五燈會元

＊

范文粹居士は、長らく南陽の襲灯禪師（香厳智閑）に参じたが、悟りに至ることができない。（ところが）ある日、漁夫の笛の音をきいて、忽然と悟った。

明くる日、投機の偈（生々しい悟りの歌）を献じた。

香厳和尚こそは、測り知れない慈悲の人、
私を本当の乗りものに気付かせ、長い長い疑惑（の闇）を断ち切らせて頂いた。
仏経五千巻という、宝の蔵のテキストを、
昨夜という昨夜は、まるまる（漁父の）笛の音の中にひびかせたのだ。

＊

○范文粹居士＝不詳。
○南陽襲燈禅師＝潙山に嗣いだ香厳智閑。青州（山東省）の人。潙山に参じたが機縁契わず、辞して南陽慧忠国師を慕ってその遺跡に詣でて寓居する。ある日、庭を掃除しているとき、瓦礫が竹にカチンとあたった音を聞いて大悟し、再び潙山に参じて証明された。偈頌にすぐれ、二百余首あったとされるが、『祖堂集』巻一九に二十余首、『伝灯録』巻二九に十九首、同巻三〇に二首が見え、金沢文庫に古写本の『香厳頌』七十六首が残されているのみである。
清代の編集である『宗統編年』巻一七には、光化元年（八九八）の示寂とするが、何に拠ったのか不詳。『祖堂集』巻一九、『宋高僧伝』巻一三、『伝灯録』巻一一、『聯灯会要』巻八、『大光明蔵』巻中、『五灯会元』巻九等に略伝及び問答語句を録す。
○漁笛＝漁人の吹く笛声。どういうものなのか具体的には不詳。杜牧「登九峰楼詩」、「牛歌漁笛山月の上、鷺渚鵞梁溪日斜めなり」（『全唐詩』五二四）。

○投機偈＝悟入したときの心境を詩に詠んだもの。『祖堂集』巻一七・岑和尚章、「師の投機の偈に曰く、處處眞なり、處處眞なり、塵塵盡く是れ本來人、眞実に説く時聲現われず、正體堂堂として身を沒却す」（『禪学叢書之四』、五―二三～二四）。

○眞乘＝真実の教え。『伝灯録』巻二・不如密多章、「王の爲に法要を演説し、眞乘に趣かしむ」（T五一―二一五c）。

○宿疑＝生前の昔より未解決の疑念。

○寶藏金文五千軸＝大蔵経五千巻。『緇門警訓』巻四「随州大洪山遂禪師礼華厳経文」、「南無毘盧教主華厳慈尊は、寶偈金文を演じ、琅函玉軸を布く」（T四八―一〇六五b）。『汾陽語録』巻上「奉宣編伝灯録入蔵師観名字乃述讃并序」、「千古萬古、泯びず藏（かく）れず、金文玉軸、永劫に清涼なり」（T四七―六〇三a）。

○夜來＝昨夜から一晩中。後の〔七二〕の偈を参照。

○向笛中吹＝「向」は「従」に置き換えられる用法。『伝灯録』巻八・潭州龍山章、「此の山は路無し、闍梨は什麼（いず）處向（こよ）りか來たる」（T五一―二六三a）。

○典拠について＝『五灯会元』と明記されるが、録されていない。また他に本則に関する資料も見い出し得ない。

〔七二〕大史黄庭堅

大史黄庭堅、往依晦堂心禪師、乞指徑捷處。心曰、仲尼道、二三子以我爲隱乎、吾無隱乎爾。大史如何理論。公擬對。心曰、不是不是。公迷悶不已。一日侍心山行、岩桂盛放。心曰、聞木蘭花香麼。公曰、聞。心曰、吾無隱乎爾。公遂釋然。即拜之曰、和尚得恁麼老婆心切。心笑曰、只要公到家耳。後晦堂訃音至、公拈香云、海風吹落楞伽山、四海禪

流著眼看。一把柳條收不得、和風搭在玉欄干。　　普燈録

＊

大史黄庭堅、往きて晦堂心禪師に依り、徑捷の處を指さんことを乞う。心曰く、「仲尼道う、二三子、我を以て隠せりと爲すか、吾は爾に隠す無し、と。大史は如何が理論す」。公は對えんと擬(す)。心曰く、「不是、不是」。公、迷悶して已まず。一日、心に侍して山行するに、岩桂盛んに放(ひら)く。心曰く、「木蘭の花の香を聞(か)ぐや」。公曰く、「聞(か)ぐ」。心曰く、「吾は爾に隠す無し」。公遂に釋然たり。即ち之を拜して曰く、「和尚は得(か)恁(く)麽も老婆心切なり」。心笑いて曰く、「只だ公の家に到らんことを要すのみ」。後に晦堂の訃音至るに、公は香を拈じて云く、「海風吹き落つ楞伽山、四海の禪流眼を著け看よ。一把の柳條收め得ず、風に和して玉欄干に搭在す」。　　普燈録

＊

宋の史官、黄庭堅が曽つて晦堂（祖）心禪師に参じたときのこと。

どうか（手っとり）早い処を、お示しください。

心　仲尼が教えている、二三子よ、私が何か（君たちに）隠しているとでも思うか。私は何一つ、君たちに隠していることはない。

史官どのはいったい、（これを）どう理論なされる。

史官は何か答えようとする。

心　ダメダメ。

史官は、迷いに迷った。ある日、心の後について山歩きしていると、岩間の金木犀の匂いが、鼻をついてくる。

心　木犀の匂いが聞えるか。

聞えます。

私は君に何一つ、隠してはいない。

史官はそのとき、すっきりと胸がはれた。

そこで礼拝して言う、和尚さま、よくもここまで、老婆心切にして（導いて）くださった。

心は咲（わら）った、閣下を家にとって帰らせただけのこと。

その後、晦堂の死の知らせがとどく。

史官は香を手にとって、（次の偈を）献じた、

ランカーの山（魔の宮殿）を、大海の嵐が吹きあげる。

四海の禅の仲間よ、よくよく注意するがよい、

何とも手に負えぬ、わずか一かせの柳の小枝が、

嵐をもろに、（宮殿の）玉の手すりに、からみついて離れない。

*

○大史＝太史に同じ。史料編纂官。元祐八年（一〇九三）に国史院編修官に任命されたことによる。

○黄庭堅＝一〇四五―一一〇五。字は魯直。号は涪翁、山谷道人、八桂老人、貧楽斎、喧寂斎、黔安居士。洪州分寧（江西省修水県）の人。治平四年（一〇六七）の進士。五年後に考試に合格して北京の国子監教授となる。元豊元年（一〇七八）三十四歳のとき、蘇軾に詩を献じて親交を結び、師事した。元豊八年（一〇八五）秘書省校書郎となり、翌年に哲宗が即位し、神宗実録院検討官となり、次第に昇進して起居舎人、秘書丞、国史編修官を経て、紹聖初年（一〇九四）に鄂州（湖北省武昌県）の知事となる。しかし、新法党の圧迫により涪州（四川省涪陵県）の別駕に左遷されて四川を転々とした。徽宗の初め（一一〇一）太平州の知事に起用されたが、またすぐに地方に貶され、最後は宜州（広西省宜山県）で六十一歳で病没した。後に文節と諡される。張来・晁補之・秦観と共に「蘇門の四学士」と称され、特に詩に長じ、「江西詩派」の祖となり、世に「蘇黄」と並び称される。居士としては初め円通法秀に参じ、元祐中（一〇八六―九四）に投子聡・五祖法演に道を問い、また晦堂祖心に参じた。庭堅が黄龍山（江西省修水県）の祖心に参ずるのは、母の死に当って、元祐七年（一〇九二）に帰郷していた二年ほどの時であり、『羅湖野録』上に、「太史黄公魯直は、元祐間に家艱に丁り、黄龍山に館し、晦堂に従って遊び、死心新老・霊源清老と尤も方外の契を篤くす」（Z一四二―四八二a）とある。『宋代伝記資料索引四』（鼎文書局印行）二九〇三頁以下に伝記に関する資料が網羅されている。仏教側の資料としては『嘉泰普灯録』巻二三、『五灯会元』巻一七、『居士分灯録』巻下、『先覚宗乗』巻三、『仏法金湯篇』巻一三、『居士伝』巻二六などがある。また宋代禅門の随筆にも散見する（石井修道「十一種宋代禅門随筆集人名索引（下）」『駒沢大学仏教学部研究紀要』第四三号）。

○晦堂心禅師＝一〇二五―一一〇〇。姓は鄔氏、諱は祖心、南雄州始興（広東省始興県）の人。十九歳のとき盲目となったが、父母に出家を許されるや、忽まちにして物が見えるようになった。初め雲峯文悅禅師に謁し、三年留まっ

たが機縁かなわず、その勧めで黄龍慧南禅師に師事した。四年修行したが契わず、雲峯に帰る。文悦が寂したので石霜山に止まり、『伝灯録』を読んでいたところ、巻一一の杭州多福和尚のところに至って、たちまち開悟した。すぐに黄龍に行き、その印可を得る。慧南が寂すと、法席を継ぐ。元符三年（一一〇〇）一一月一六日示寂す。閲世七十六、僧夏五十五、宝覚の号を賜う。伝記の第一資料は、黄庭堅の撰になる「黄龍心禅師塔銘」（『予章黄先生文集』巻二四）である。他に『続灯録』巻一一、『禅林僧宝伝』巻二三、『聯灯会要』巻一四、『普灯録』巻四、『五灯会元』巻一七等に略伝と問答語句を録す。また『黄龍晦堂心和尚語録』（Z一二〇）があり、『続刊古尊宿語要』巻一（Z一一八）にも語録が存す。

○徑捷＝早道、要領を得て手っ取り早い。『叢林盛事』巻上、「禪家者の流は、事を説くに枝蔓にして徑捷ならざる者を見て、之を葛藤と謂い、往往にして鄙誚す」（Z一四八―三一a）。

○仲尼道……＝『論語』述而篇の言葉。「子曰く、二三子、我を以て隠せりと爲すか、吾は爾に隠すこと無し。吾は行う所として二三子と與ならざること無し、是れ丘なり」。

○理論＝道理に契った言挙げ。黄檗『宛陵録』、「此の一心の法體は、虚空を盡くし、法界に徧ねし、名づけて諸佛と爲す。者箇の法を理論すとも、豈に是れ汝が言句上に於て他を解し得るものならんや。亦た是れ一機一境上に於て他を見得るものならず。此の意は唯だ是れ默契するのみ。者の一門を得るを、名づけて無爲法門と爲す。若し會得せんと欲せば、但だ無心を知れ。忽ち悟れば即ち得ん。」（T四八―三八五b）。

○心曰、不是不是＝それもう徑捷でなくなったぞ。『肇論』答劉遺民書、「至理は虚玄なり、心を擬すれば已に差う、況乃や言有るをや」（T四五―一五七a）。『臨済録』示衆にも、「心を擬すれば即ち差い、念を動ずれば即ち乖く。人有って解せば、目前を離れず」（T四七―五〇一b）。

○迷悶＝底本は「迷閔」に作るが、嘉靖本により校改した。
○岩桂＝巖桂に同じ。木犀の異名。秋に花をつけ、芳香を放つ。次条で祖心が木蘭花と言うのは、『禅門宝蔵録』の編者の不注意による誤まり。「放」は花が綻び開くの意。韓維「登湖光亭」詩、「翠痕地に満ちて初めて草を生じ、紅氣林に通ずるも未だ花を放かず」。
○聞木蘭花香＝木蘭花の香気を嗅ぐ。李商隠〈和張秀才落花有感詩〉、「晴れ暖くして餘芳を感ず、紅苞絳房に雑る。落時猶お自ら舞うがごとく、掃後更に香を聞く」（『全唐詩』五四〇）。
○釋然＝疑や迷が解け、さっぱりするさま。『世説新語』言語篇、「樂令の女、大將軍の成都王穎に適ぐ。王の兄の長沙王の洛に權を執るや、遂に兵を構えて相い圖る。……樂令は神色自若として徐ろに答えて曰く、豈に五男を以て一女に易えんや。是れに由りて釋然とし、復た疑慮無し」。
○老婆心切＝老婆のような親身な心遣い。『伝灯録』巻一二・臨済章、「師、大愚を辭して黄檗に却廻る。黄檗云く、汝廻ること太だ速生し。師云く、秖だ老婆心切なるが爲なり」（T五一―二九〇b）。
○到家＝本来の家郷に帰る。『伝灯録』巻二九・同安禅師十玄談〈還郷曲〉、「撒手して家に至るも人識らず、更に一物として尊堂に獻ずるもの無し」（T五一―四五五b）。廓庵和尚『十牛図』亡牛存人の頌、「牛に騎りて已に得たり家山に歸ることを、牛も也た空じ人も也た閑たり」（Z一一三―四六〇a）。
○公拈香云……＝以下の頌は『予章黄先生文集』巻一五に「爲黄龍心禅師焼香頌三首」のうちの一首として録されている。その三首を示すと次のようである。

（1）老師身今七十六、老師心亦七十六。夢中沈却大法船、文殊頓足普賢哭。
（2）一拳打破鬼門関、一笑吐却野狐涎。四海崢嶸龍象衆、鼻頭只用短繩牽。

（3）海風吹落楞伽山、四海禪徒著眼看。一把柳絲收不得、和風搭在玉闌干。

○海風吹落楞伽山……和風搭在玉欄干＝「海風が吹きまくる楞伽山に、どうしてもとらえられない一束の柳の枝が美しい欄干にしなだれかかって風に吹かれているのを、国中の禅僧たちよ、よく見るがよい」。楞伽山は『楞伽経』の説処として知られ『楞伽経』巻一に、「一時佛は南海の濱の楞伽山頂に住す」（T一六―四八〇a）とあり、『入楞伽経』巻一にも、「一時婆伽婆は大海の畔の摩羅耶山上の楞伽城中に住したもう」（T一六―五一四c）という。澄観『華厳経疏』巻五六には「楞伽は梵音、此に難往と云う。……此の山は海の中に居（あ）り、四面門無く、得通の者に非ざれば往く莫し。故に難往と云う」（T三五―九二五c）と解説されている。ラーマーヤナ（古代インドの叙事詩）に登場する魔王ラーヴァナの都として有名であるが、その場所についてはセイロンとする説など種々あって決定されていない。『楞伽経』に対する関心は『楞伽師資記』以後、一度とだえ、馬祖によって見直しが行われたが、以後は次第に関心が薄れていく。しかし、この時代、楽全先生張安道（方平）によって再刊され、蘇軾が序を書き、再び関心が高まっていた。ここでは楞伽山は祖心その人に、玉闌干にしなだれかかっている柳条は現成しているが不可得なる法に喩えられていよう。また「海風吹落」は無常の風に吹き落とされたことを暗示するものか。「一把柳條收不得、和風搭在玉闌干」はもと徐仲雅の宮詞詩の一節。「内人曉起して春寒に怯（おじ）け、輕く朱簾を揭げて牡丹を看る。一把の柳絲收め得ず、風に和して玉欄干に搭在す」（『全唐詩』七六二）。「搭在」は掛ける、掛かる。『五灯会元』巻一二・黄梅龍華曉愚章、「師、五祖戒和尚の處に到る。祖問うて曰く、唇吻（ことば）に落ちずして一句作麼生が道う。師曰く、老老大大、話頭も也た照顧せず。祖便ち喝す。師も亦た喝す。祖、棒を拈（と）る。師、手を拍って便ち出ず。祖召して曰く、闍黎且く住まれ、話在り。師は坐具を將って肩上に搭在し、更に回首せず」（Z一一八―二一六b）。

○典拠について＝『普灯録』と明記される。いま『嘉泰普灯録』巻二三・黄庭堅章をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようである。

太①史黄庭堅居士、字魯直、號山谷。以般若夙習、雖膴仕、澹如也。出入宗門、未有所向。好作艶詞。嘗謁圓通秀禪師。秀呵曰、大丈夫翰墨之妙、甘施於此乎。秀方戒李伯時工畫馬事。公誚之曰、無乃復置我於馬腹中耶。秀曰、汝以艶語、動天下人婬心、不止馬腹、正恐生泥犂中耳。公悚然悔謝。由是絶筆、惟孳孳於道。著發願文、痛戒酒色、但朝粥午飯而已。往依晦堂祖心禪師、乞指徑捷處。心曰、只如仲尼道、二三子以我爲隱乎、吾無隱乎爾者。太①史居常、如何理論。公擬對。心曰、不是不是。公迷悶②不已。一日侍心山行次、時巖③桂盛放。心曰、聞木犀④華香麽。公曰、聞。心曰、吾無隱乎爾。遂⑤釋然即拜之曰、和尚得恁麽老婆心切。心笑曰、只要公到家耳。久之如雲巖、謁死心新禪師、隨衆入室。新見張目、問曰、新長老死、學士死、燒作兩堆灰、向甚麽處相見。公無語。新約出曰、晦堂處參得底、使未著在。後左官黔南、道力愈勝、於無思念中、頓明死心所問。報以書曰、往年嘗蒙苦苦提撕、長如醉夢、依稀在光影中、蓋疑情不盡、命根不斷、故望崖而退矣。謫官在黔南道中、晝臥覺、忽然廓爾尋思、被天下老和尚謾了多少、惟有死心道人不肯、乃是第一相爲也、不勝萬幸。後作晦堂塔銘曰、某夙承記莂、堪任大法、道眼未圓、而來瞻窣堵、實深宗仰之歎、乃勒堅珉、敬頌遺美云。先⑥是晦堂訃音至、公設伊蒲塞供、拈香説偈曰⑦、海風吹落楞伽山、四海禪徒⑧著眼看、一把柳絲⑨收不得、和風搭在玉闌⑩干。（Z一三七―一五八c）

大字は共通する文字、小字は『普灯録』にのみある文字。

①太＝大（宝蔵）　②悶＝閔（宝蔵）　③巖＝岩（宝蔵）　④犀華＝蘭花（宝蔵）　⑤（公）＋遂（宝蔵）
⑥先是＝後（宝蔵）　⑦曰＝云（宝蔵）　⑧徒＝流（宝蔵）　⑨絲＝條（宝蔵）　⑩闌＝欄（宝蔵）

他にこの話を録すものとしては『羅湖野録』巻上、『五灯会元』巻一七・黄庭堅章がある。また儒教仏教の調和を唱えた書である今北洪川の『禅海一瀾』巻下・第八則に採られて論じられている。